

# 教授に就任して



## 口腔病理学分野教授の就任の挨拶

口腔病理学分野教授 田 沼 順 一

新潟が記録的な豪雪の中、平成30年2月1日付で口腔病理学分野の教授に就任いたしました、田沼順一（たぬま じゅんいち）と申します。私は埼玉県加須市の生まれで、日本一暑い街熊谷市や映画や小説の“のぼうの城”の行田市と隣接しているところです。加須市は五家宝や天皇陛下も召し上がる冷汁うどんが有名な郷土料理であり、うどん屋の数が人口10万人ほどなのに100軒以上もあるうどん王国です。

出身高校は今話題の日本大学豊山高校で、作家で新潟出身の坂口安吾、俳優の伊勢谷友介などの卒業生がいます。高卒後は日本列島の南端にある鹿児島大学歯学部に進学しました。鹿児島市は、桜島の火口からわずか4 kmしか離れていないため、年間1000回の噴火のたびに灰が襲って来ますので、大学でも自宅でも窓を開けて空気の交換をする習慣がないのが、鹿児島の暗黙のルールです。しかし、“鹿児島の黒”と言われる黒牛、黒豚、黒さつま鶏、黒酢、黒糖焼酎、うなぎなどの黒と名の付いた名物が多くあり、海産物などは大変美味しいところです。

私は歯学部の3年時より、口腔病理学の北野元生教授（埼玉県立がんセンター病理部長、小倉記念病院や中津市民病院病理部長を歴任）の研究室にてラットを用いた動物実験を手伝い、舌癌の発がん研究の基礎を学びました。教授の名言で“ねずみに盆も正月もない”と365日努力することが大切であることを痛感したことから、歯科医師国家試験の前日もラットの床変えやケージ交換100

箱以上終えてから試験場に向かったことも懐かしいエピソードです。

卒業後大学院歯学研究科（口腔病理学）に進学した4月には、実家に近い埼玉県立がんセンター病理部・研究所病理部で3年間研修医として、病理解剖（解剖体70体以上）と学位研究（舌癌感受性遺伝子の検索）に研鑽しました。その当時の病理部長は高校の先輩である岸紀代三先生（弘前大学）で、新潟大学出身の黒住昌史先生（現病理部長）に熱心なご指導をして頂き死体解剖資格を取得できました。また研究所病理部では副部長の志佐湍先生（動物実験施設長・三重大学）に動物実験のイロハを学び、分子生物学的手法は京都大学日合弘教授（第一病理学）の研究室で、賀本俊行助手（現宮崎大学泌尿器科学教授）および豊國伸哉講師（現名古屋大学病理病態学教授）のご指導を受けることができたので、学位論文はがん研究のリーディングジャーナルCancer Res (IF:9.13)に掲載されたことから学位取得後の1998年に歯学部助手に任命されました。

その後助手の期間は教育・研究・診断を三位一体のごとく毎日午前様の帰宅で頑張っていたお陰で、日合教授の紹介で英国ケンブリッジのMRC分子生物学研究所に留学の推薦を頂きましたが、実父の急死の理由で、急遽ミラノ市のイタリア国立がん研究センター研究所実験腫瘍学部長のDragani氏のラボに留学するになりました。このラボは肺がん研究ではNature Geneticsに何本も掲載されるなどレベルは極めて高いもので、

ラボメンバーはポスドクを含め12名を超える大所帯でありましたが、私とボス以外はモデル並みのイタリア美人で、毎日が浦島太郎状態でした。また全くイタリア語が話せなかった私は、1年もするとラボの電話番、研究品の発注などの日常会話は不自由なくできるようになったことも、研究成果の1つになるのでしょうか？ 留学中は、あのニューヨークの9.11事件や貨幣がイタリアリラ（私の月給700万リラ）からユーロに変更するなど欧米世界が激動の時代に入っていた時でした。帰国後は鹿児島大学では、現口腔病理学教授の仙波伊知郎先生のもと、准教授として5年間教育と診断を中心に大学院生の学位の指導を行っていました。そして2010年からは岐阜県の朝日大学口腔病理学の主任教授として赴任しましたが、病理診断はもちろん研究・教育が全く機能しておらず、ゼロから機材や人材を集めることに奔走する毎日でした。ただその時に現在のがん研究のブレイクスルーとなる液状化検体細胞診（LBC）に出会い、細胞診専門医を取得するなど、新たな研究のきっかけとなったことには感謝しております。

さて、新潟大学に着任して早半年、日々口腔病理学分野で教育・研究・診断（病理検査室長）に従事しているわけですが、まず新潟に来て鹿児島大学時代にCBTやOSCEで大変お世話になった

小児歯科の早崎治明教授、斎藤一誠准教授、岩瀬陽子助教がいることは心強く感じました。さらに前田健康学部長には歯学部の場合だけでなく様々なご指導・鞭撻を詳細にしてくださることにいつも感謝申し上げます。また歯科放射線の林孝文教授、口腔外科学の高木正治教授と小林正治教授には毎週の口腔がんカンファレンスなどで常日頃からとても良くしてくださるので、ほとんど苦労することなく病理診断ができています。病理医は直接、患者様を診察することはありませんが、病理診断を通して臨床医に適切なアドバイスをすることから、欧米諸国では、医者コンサルタントdoctor of doctors (doctor's doctor) と呼ばれているように、臨床研究と基礎研究の橋渡しをすべく、様々な研究を行っていく予定です。

最後に、口腔病理学分野では歴代の教授が口腔がんの研究を行ってきました。このような講座の後任を担当させて頂くことは、大変光栄なことですが、今後は新潟大学病院のがんゲノム医療中核拠点病院への承認に向けて病理診断室のISO取得など様々な問題への取り組み、口腔がん検診や液状化検体細胞診など地域貢献できるように精いっぱい努めさせていただく所存です。どうぞ宜しくお願い致します。